

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4370800502		
法人名	社会福祉法人 愛隣園		
事業所名	愛隣の家グループホーム		
所在地	熊本県山鹿市津留2025-1		
自己評価作成日	平成22年12月24日	評価結果市町村受理日	平成23年3月14日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://search.kaigo-kouhyou-kumamoto.jp/kaigosip/Top.do
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 あすなろ福祉サービス評価機構		
所在地	熊本市南熊本三丁目13-12-205		
訪問調査日	平成23年1月24日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

県北の自然豊かな地に位置し、関連施設が多数隣接し、近くに公園もある環境と木造で温もりある建物を活かし、「ゆっくり笑顔であるがまま 楽しくみんなとつながろう」の理念実現のために、地域との交流を大切に、本人らしく、入居者と家族との関わりを大切にする安心できる生活を目指しています。全職員がサービスの質の向上を目指し研修会など積極的に参加、また、関連施設との連携から、安全や介護技術の向上が図られている。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

福祉機能が集中する敷地の中にあるホームは、法人施設の行事参加やコーラスクラブ等人的交流や緊急時体制・職員の研修体制が確立している中、昨年度の評価結果の課題への取り組みにより更なる充実感が窺われる。職員の入居者への熱い思い、寄り添いのケア、傾聴が入居者の落ち着いた穏やかな日常生活となって表出されている。個々の得意分野や心身の状況を視点に置いた主体性のある個別ケアや隣接特養でのコーラスクラブへの参加や法話会・慰問見学等多様な外出支援は“今を楽しみ今を喜びながら”とする介護目標の実践である。職員は笑顔でケアに当たり、入居者・職員同士の労いの言葉かけ、入居者同士もお互いを支えあう姿等家族・仲間としての生活が垣間見られた。運営推進会議は地域での生活拡充につながり、認知症ケア啓発の一環としてその機能を十分に発揮し、家族からの信頼度も高く、協力的な家族とともに温かみのあるホームを形成している。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当する項目に○印
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	<input type="radio"/> 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、活き活きと働けている (参考項目:11,12)
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I.理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	「ゆっくり笑顔であるがまま 楽しくみんなとつながろう」を職員でつくり、玄関・台所・職員トイレ等に掲示、朝礼や話し合いにて共有、この理念を元に全職員が常に意識し行動、実践につなげている	“ゆっくり 笑顔で あるがまま”とは本人らしい暮らし、“楽しく みんなと つながろう”とは入居者・家族・職員・行政などとともに支えあうことと具現化して理念を示し、その意義をもとにした目標を掲げている。運営推進会議の中での啓蒙や管理者はミーティング時等に意見が出ないときやケアへ行き詰ったときには理念をもとに考えて行動することを訓示している。笑顔でのケアや入居者・職員同士の労いの言葉かけ、入居者同士もお互いを支えあう姿等温かい雰囲気醸し出しており、理念の実践に全職員が真摯に取り組んでいる。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	地域の三岳文化祭に作品掲示、リサイクル回収に協力、どんどやなど参加。法人夏祭りや秋の大祭の馬追いなどの慰問の時に地域や家族に案内。近隣の方に声かけし、散歩の途中などに気軽に立ち寄りもらっている	地域行事や法人全体での夏祭り等行事時の地域住民との交流、保育園児の慰問等世代間交流にも取り組む等多様な交流を展開している。小学校等のリサイクル活動への協力や道路沿いの草取り等地域の一員として活動し、地域住民の立ち寄りもあり、理念の“つながり”を地域住民の協力も得ながら実践している。	地域資源を活かした積極的な外出支援は大きな楽しみになっている。職員以外の様々な住民との接する機会は心身の活性化にもつながっていると想われ、今後も継続されることを期待したい。
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	人材育成の貢献として実習生の受け入れを積極的に行っている。(九看大の福祉学科と看護学科、城北高校生、新規事業所の職員など)中学生のワークキャンプの受け入れも積極的に行なっている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	事例報告や地域行事などでの様子を報告し、認知症について意見交換のなかで、認知症への理解を深めサービス向上につなげている	定例化した運営推進会議はホームの特色や活動を啓蒙し、近隣住民や地域との連携を強化し、地域に根ざしたホームであるべく透明性の確保となり、情報交換や話し合いをサービスに反映させている。外部評価結果報告は、ホームの生活が楽しみにつながっていること等認知症状があるという状況にありながらもそのイメージを払拭する機会としている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	運営推進会議に地域包括支援センター職員の毎回の参加により相談しやすく、連携の強化につながった。また、市主催の研修会も多く、相談しやすい。	市主催の研修や鹿本菊池ブロック研修会には行政担当者の参加もあり情報交換の場となり、運営推進会議に毎回行政担当者や包括支援センター職員の参加があり何事も相談できる関係にある。ホームも地域の新事業所開設(グループホーム・小規模多機能事業所等)委員会に参画し、後見人制度利用等を相談する等相互連携を図っている。	福祉人材育成への寄与や運営推進会議を通して認知症ケア啓発は大いに評価できる。今後も行政と一体となってホームのケア実践を発信することで、地域住民への認知症の認識を深める一環とされることを期待したい。
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	隣接施設との合同の身体拘束廃止委員会に参加することにより、理解や意識を高め、全職員への回覧や報告。又、研修参加により、身体拘束をしないケアに取り組んでいる。	法人での身体拘束廃止委員会への参加やホーム内でも管理者はゆとりのあるケアや方向性の違いを全職員に投げかけ、報道を事例に意見交換を行っており、拘束はもともとしないものであると全員が認識している。ホーム内は開放的であり、個々の状態の観察、所在確認の徹底、外出傾向を察知し一緒に散歩に出かける等自由な生活を支援している。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	全職員が虐待防止に関心を持ち、事件の報道を話題にあげ、意見を出し合い防止に努めている。又、定期の身体拘束委員会に参加し、全職員に回覧・報告。毎月の全体会議では、身体拘束について学ぶ機会が設けてある。他職員の研修報告から学ぶ機会もある		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	管理者は家族より相談受け、助言や協力などの支援している。(現在まで、6件の相談・協力)職員は学ぶ機会があり、情報の共有もできている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	十分な説明を行い、不安や疑問を必ず尋ね、理解・納得を図っている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	利用者の言葉や態度から、要望を聞き、察する努力や言いやすい働きかけにて、運営に活かしている。毎月家族との話し合いの機会を設け、運営推進会議や家族会などにての意見を出せる機会から、運営に反映できるようにしている	入居者には日常の関わりの中で意見や要望を引き出すよう寄添いのケアに取り組んでいる。家族訪問時何でも気軽に話し合える雰囲気心がけ、運営推進会議や家族会を問題提起の場・家族同士の交流の場と位置づけ意見や要望をホーム運営に反映させている。家族会の中での無記名アンケートでは家族からの感謝の言葉も多く、職員のモチベーションとなり、家族の要望に具体的な改善が図られていることを確認した。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	管理者は、職員に対し、話し合いやミーティング、1対1の時など、意見や気づきを言えるように働きかけ、すぐに反映させている。運営者は、月1回の所属長会議・全体の職員会議や日頃の報告・相談にて、職員の意見を反映している	毎月各事業所が集まる所属長会議や全体会議の中で話し合う他、職員からの提案を随時全員で検討しサービス向上を図っている。冬の勤務調整や連休のとり方等職員と話し合ったり、鍵の設置場所の統一等具体的に改善している。管理者と職員とのコミュニケーションも良く、報・連・相を徹底している。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	柔軟な対応ができるよう、必要な時間帯に職員を確保するための話し合いや勤務の調整に努め、変更や工夫をすぐに行っている。職員がやる気の出せる職場環境や整備に常に努めている		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	鹿本・菊池地域での研修会・隣接の特養での合同研修会、県や他事業所の研修会等、多くの職員が受講できる配慮。研修後は報告書提出し、全職員が必ず閲覧及び話し合いができています。事故予防、衛生管理、身体拘束委員会参加及び報告ができています。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	鹿本・菊池地域のネットワークづくりや勉強会や相互に相談・アドバイスできる機会がある。隣接の看護師・介護職員・管理栄養士との交流もあり、質の向上につながっている		
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	不安や要望を言いやすい働きかけや本人と向き合う姿勢を常に持ち、配慮や努力をしている。センター方式も活用している。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	サービスを導入する段階で、家族等が困っていることや不安・要望等に耳を傾けながら、相談しやすい声かけや雰囲気作りを行い、家族との信頼関係作りにも努力している。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	本人や家族との話し合いの中から、その時、本当に必要としている支援を共に考え、介護計画や環境作りを行なっている		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	生活全般、本人の経験や知恵を言いやすい働きかけから、職員と共に暮して楽しむ場面を作り、共に暮す関係を築いている。また、本人の人生を理解した上で、共に生活を考えるように全職員が接している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	家族と共に本人を支え合う関係をつくり、家族会(年2回開催)での家族同士の交流により、家族の絆の大切さが再認識できるように働きかけている。夏祭りや外出・外食・買物・通院には、家族の協力もあり共に支え合っている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	馴染みの場所への散歩や友人への電話・手紙、隣接の施設におられる馴染みの人のおしゃべりの支援。馴染みの人と神父様が共に定期的に来訪されている。地域の行事参加時に、馴染みの関係ができています。近隣の馴染みの方が散歩途中におしゃべりに立寄られる	以前の利用施設先へ出かけたり、毎月家族と墓参りに出かける人、定期的な友人の来訪、教え子の訪問等支援している。「実家に行ってみよう」との言葉と一緒に出向いたり、端午の節句や紀元節等の昔からの行事・慣習や散歩時等近隣住民や友人と出会い歓談等家族の協力も得ながら人・場所の関係性が途切れないよう取組んでいる。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者の相性・要望を考え、食堂や居間での席を配慮。役割分担により利用者同士が支え合っている事を実感されている。又、孤立することが無いように職員が橋渡しになり、より良い関係づくりを支援している。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	他施設に入所された方に会いに行き、関係を断ち切らないようにしている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	センター方式の活用により、家族から本人の人生の情報を把握し、本人の希望を聞き取りながら、本人本位の生活を検討している。又、要望の訴えない方には、顔の表情や行動、態度、家族からの情報をもとに本人の想いを検討している	センター方式により個々の情報を把握し、日々のかかわりの中で入居者の思いや意向を引き出し、会話の中で思いを推察し、ケース記録により職員で情報を共有している。意思疎通・意思表示が困難な方には表情・態度等から推察したり、家族の情報をもとに全員で検討している。「花が好きだった」との家族からの情報により菊池高原への遠出や音楽が好きだったという入居者はコーラスクラブや音楽会に出かけることを支援する等本人本位の生活を支援している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入所前の施設や家族からの情報だけでなく、入所後も家族や本人との会話から生活歴を収集している。センター方式を活用し、家族にも記入してもらうなどにも努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	生活歴や本人の想いを踏まえ、個別の1日の過ごし方を把握している。又、少しの変化でも適宜記入・共有・ミニカンファレンスの開催にて検討し、全職員で連携をとり、把握している。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	担当制にて、「私はこうしてもらったら嬉しい」、「人生マップ」などのシート活用、家族の訪問時に意見や要望を聞き、全職員で検討する機会を持っている。主治医からの意見も聞いている。	ライフサポートプランを採用し、本人・家族・ホームとが一体となって関わるプラン、一緒に楽しく過ごすことを目指したプランを立案している。日々の記録の充実、3ヶ月毎のモニタリングでは本人・家族の満足度を検証し介護計画担当者や担当職員と話し合い、達成度を見極めプランに反映させたり、心身の状態変化に随時見直し現状に即したプランを作成している。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	本人の変化や状態が一目でわかりやすいように職員で考えた記録用紙(昼夜)やセンター方式の用紙活用で、情報を共有したり、気づきをすぐに記載し検討、実践や介護計画の見直しに活かしている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々にも生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	愛隣園法人事業の多機能を活かした柔軟な支援や協力体制がある。慰問や法人夏祭りなどは、地域の方の楽しみにもなり交流の場である。昔ながらの行事(大祓い、紀元節式典、花まつり、法話会など)や音楽療法、敬老の日には、お祝いの手作りお菓子や劇へのお誘いあり、喜ばれている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	多数の施設が近隣にある関係で、保育園・踊り等の慰問や各行事は、ホームに必ず声かけの働きかけがあり、外出の支援ができています。また、運営推進会議にても働きかけをしている。ボランティアの活用にて交流を楽しまれている		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	本人や家族の希望を聞き、かかりつけ医の受診受診を家族とホームとで協力して、受診介助、情報提供を行い、医師との連携にて、適切な医療を受けられるように体制を整えている。家族への連絡・報告も行っている。	入居者の元々のかかりつけ医を引き続き支援し、希望に応じて協力医への移行を行っている。往診や訪問歯科には職員が立ち会い、受診時は家族も同行する等協力が得られている。結果内容を家族に報告し共有に努めている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	医療連携体制を整えることにより、医師との連携のうえで、日常の健康管理や状態変化に応じた支援や適切な医療活用により、利用者の支援ができています。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時は毎日、職員のお見舞いと病院の看護師より情報提供受け、経過記録記入。又、ダメージ防止のため居室にある馴染みの物を持っていったり、早期退院できるように病院関係者に働きかけをしている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所ですることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	毎年、事前確認書記入してもらい、話し合う機会を作っている。重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人や家族等、かかりつけ医とも話し合っている。全職員、方針の共有ができ、チームで取り組む体制が出来ている。重度化への対応は、その都度に全職員で検討し、見直している。(入浴、食事、排泄、外出、他)	一年に一度“事前指定書”による家族やキーパーソン以外の家族へも意思確認を実施し話し合いの場を持っている。重度化や終末期に向けたホームの方針を全職員が認識し本人・家族の意向を尊重しながら支援したいとしている。過去にかかりつけ医や家族の連携により終末期ケアの実例があり職員は外部研修や勉強会に積極的に参加している。今後も自らの質の向上に努める意向である。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	急変や事故発生時に備え、全職員がマニュアルを把握している。隣接の特養の勉強会にも随時参加している。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	関連施設が多く、緊急時の協力体制あり。消防署来所にての火災訓練や緊急用ボタンで隣接施設からの協力体制及び訓練もできており、夜間想定訓練も行っている。毎晩、隣接施設職員の声かけ、見回りをしてもらっている。運営推進会議にても話し合っている。	本年度、消防署立ち会いの総合訓練と自主訓練を実施している。非常ベルにより母体施設より入居者の避難を最優先に、職員が駆けつける体制がとられている。地震、水害等についてもマニュアルを整備し避難場所を変更しながら訓練を実施している。又ろうそくや懐中電灯、食料品を備蓄し有事に備えている。	
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	本人の自尊心を傷つけないように常に考え、声かけやケアを行っている。申し送り時は、名前でなく居室の番地を活用して配慮している。玄関の面会簿や居室の名札は、事前に家族の了承を得ている。	職員は居室への入室の際必ずドアをノックし、入居者のトイレ使用時はドアの外でゆっくり待つ等プライバシーに配慮した対応を心がけている。広報紙への写真掲載については家族だけに配布し了解を得ている。管理者は守秘義務について職員に確認し、漏洩防止に努め共通認識でケアに取り組む様指導している。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	選択肢を作り本人が選択しやすい場面作りや、日常生活の中で希望、関心、嗜好を言える働きかけをゆっくりとした声かけで行っている。本人の選択後や自分で言えない方に対しても反応や表情などで納得されているかを確認している。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	本人のペース優先で、柔軟な対応を心がけている。地域や関連施設での行事等も強制することなく本人の選択に任せている。また、本人の希望を確認し、【その時に何を優先すべきか】を絶えず頭の中に入れ実行。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	本人の希望に合わせ、地域の美容室や移動美容室を利用。毎日、化粧されている方もある。服装は、本人に選んでもらうので、若々しい服装や明るい服装を選ばれるようになった方もおられる。外出や行事に合わせた服装選びの声かけや支援。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	食事の楽しみを重視、嗜好把握し、喜びある食事に努めている。特に食欲ありすぎの方(糖尿病)への調理や盛り付けの工夫や好き嫌いの多い方への対応が出来ている。能力に応じ、調理や盛り付け、後片付けなどできる場面作りを積極的に支援している。	献立は入居者の意向を反映し栄養士がたてている。個別の嗜好表を作成し代替品や、個々が好む魚の部位に至るまで記入し支援している。息子さんからプレゼントされたエプロン姿で料理のつぎわけに精を出す入居者や、配膳、下膳、食器洗い、買い物への同行等自然発生的に調理に関わっている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	栄養士が中心となり、本人の希望を取り入れたバランスのとれた献立、確実な水分補給の支援。病気でも家庭的で満足できる工夫。朝のパンなど本人の習慣を大切に、食事摂取量のチェックも行う。個人嗜好表の活用。好き嫌いの多い方や飲み込みが上手に出来なくなった方のために、常時代替を用意している		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないように、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後、口腔ケアの能力に応じた支援を行っている。また、入れ歯洗浄(薬)も行っている。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄チェック表の使用によりパターン把握し尿漏れやおむつの使用量を減らしている。時間ごとにさりげなくトイレへ声かけ・誘導。陰部洗浄や清拭も随時行っている。本人に合った排泄について話し合っている。	個々の排泄パターンを把握し、声かけやさりげない誘導によりトイレでの排泄を支援している。排泄用品の使用にあたっては、試供品で幾つかの物を試しながら本人にあった物で対応している。トイレでの排泄を継続する為にイスから立つ訓練や足ぶみを日々の生活の中で取り入れ実施している。失禁時もホットタオルでの清拭や洗浄により清潔保守に努めている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	個人に合わせたヨーグルトや野菜・繊維の多い食品を使った食事作りの工夫で便秘予防 又、水分補給と運動や散歩の働きかけの支援にて、自然排便を増やしている。主治医への相談も行なっている		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	回数や順番は、本人の希望に合わせている。しょうぶ湯やゆず湯など季節を味わい楽しめる支援。朝風呂希望の方にも支援。入浴拒否の方への時間をかけた誘導や支援も行なっている。足浴も実施。	毎日午後からの入浴を支援し夏場は午前中でも応じている。時間や回数は入居者の希望に合わせてゆっくり入ってもらう様心掛けている。天然木の浴槽は暖かい空間を演出している。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	本人に合わせた就寝。温湿度に注意し、加湿器や個人に合わせたエアコン・あなか・氷枕の使用。自由に各居間のイスやソファ・ベッド・畳にて休息してもらっている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	個人別処方箋ファイルが、常時すぐに見れる場所にあり、全職員は薬の目的や副作用、用法や用量について理解。変更時は確実な申し送りの工夫と実践。症状変化時は、看護師・主治医に相談や報告。服薬は、個人能力に応じ介助し、確実な服薬のために声かけと工夫を行っている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	個人の生活歴や力を把握し、これを活かした役割(調理、食器洗い、洗濯干し・たたみ、台拭きなど)や楽しみ(踊りや詩吟の披露、歌、おしゃべりなど)にて張り合いのある生活につながる支援をしている。季節感を大切にしたりした楽しみや本人が1人で出来る役割の工夫を考慮して支援。個別の嗜好品がいつでも食べれる支援もしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	希望に合わせた外出や季節を感じる外出・関連施設での慰問等の外出支援。家族の協力にて外食や外出、近くのみかん山、八千代座、地域の行事にも外出でき喜ばれている。近所の花を摘み、生け花を楽しむ支援や近くの公園への散歩も出来ている。毎週楽しみの移動パン屋での買物は、店員さんとの会話も楽しみにされている。	入居者は家族や職員の協力、支援により様々な場所へ出かけ、地域の人々との交流に取り組んでいる。近隣の散歩では道端の草花を摘み、公園にいる猫を可愛がったり何気ない日々を大切に過ごしている。移動パン屋での買い物を毎回心待ちにされており、何をかうか迷われたりと入居者に選択の場を提供している。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	全職員、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、本人の管理能力に応じ、個人の希望、及び、家族との話し合いにより、自己管理や外出時のみ等の支援をしてくる。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	自由に電話をかけることができ、電話がかかってくることもある。手紙や年賀状のやり取りをされている方もいる。電話は2台設置により、使いやすい場所を利用してもらっている。目が見えにくい方には代読。家族への電話の声かけ・支援。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	季節感を感じてもらうために、入居者と家族が共に、季節に応じたホーム内の飾りつけをしたり、季節の花や果物を飾っている。必要に応じ、寒冷遮やすだれ・よしず・カーテンを使用したり、テレビやラジオの音量にも常に配慮している。個人に合ったイスや目印の使用。	木の温もりがあるホームは廊下や共用空間にも木材がふんだんに使われている。入居者は食堂や居間でおもいおもいにくつろぎ職員と一緒に談笑されている。家族の協力で絵が飾られ食堂のイスは高さや使い勝手により個々にあったものを提供している。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	食堂・2つの居間にて、ソファ・数種類のイスが随所に置いてあり、自由に選んで過せる場所に配慮。また、入居者同士の相性も考慮。台所での昼食後のコーヒーと井戸端会議を楽しみにされる方もおられる。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	使い慣れた家具、仏壇、イス、毛布類、ラジオ、テレビ等や家族写真を自宅より持参。居室は和室と洋室があり、ベットは希望にて使用、畳に布団の方もいる。自分で書いた習字紙を居室に張られる方もおられる。仏壇には、毎日御仏飯とお茶を上げている。気の合った者同士でお互いの居室で楽しく過ごす配慮もできている。	持ち込みの品も多く、入居者の使い慣れたタンスやイス、テレビや仏壇等様々な物が居室が我が家であることを象徴している。入居者も自室を大切にされ自分で掃除をしたり、家族が花や写真を飾るなど家族の思い入れも深く、生活歴に合わせフローリングや畳の部屋で対応している。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	居室は番地と名札を掲げ、本人のわかる目印で混乱を防いでいる。基本バリアフリーで安全に配慮した作りの中、個人の能力をみて、できるだけ自立した生活がおくれるように手すりを増やしたり、個人に合わせた工夫をしている。		